

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 韓国大邱市で交わしたパートナーシップ
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 112, No. 11, pp. 36-37
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 112, No. 11, pp. 36-37
発行日 / Pub. date	2015, 11



知財見聞録

韓国大邱市で交わしたパートナーシップ

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

清華大学のシンポジウムで 偶然隣席した韓国の先生

3年前になると思うが、筆者が清華大学での集中講義で中国に滞在していた時、同大学においてパソコン、スマホ等の画面に表示されるアイコンの意匠権保護に関する国際セミナーが開催され、筆者もそのセミナーに参加することができた。

同セミナーには日米欧の意匠審査官、マイクロソフト副社長、主要国からの学識経験者が一堂に会し、今後のアイコン保護のあり方を議論する貴重な機会であった。

その時、たまたま会場で筆者の隣に座っていたのが韓国慶北大学IT&Law研究所のBae Daeheon教授であった。会場内での短時間の会話であったが、それ以降、毎年、慶北大学の国際会議に招待していただいていた。

慶北大学の国際会議への参加

毎年、別件の出張と重なり、大邱市の慶北大学行きは実現できずにいたのだが、本年2月、ようやく招待に応え、「International Conference, IT&Law Research Institute in 2015」という国際会議における研究発表に参加した。

筆者のセッションでは、Yeungnam UniversityのLee Donghyong教授、韓国特許庁(KIPO)のKim Jisoo特許業務部長と筆者の3人によるディスカッションが計画されていた。

また、長崎大学から教育学を専門とする井出弘人准教授が参加され、IT時代にSNSから受ける児童の心理と情報倫理に関する講演がなされた。

両国関係を見る第三者の目

国際会議の会期中、日中韓の教授らによる国際親善の機会を得た。

日韓関係、日中関係ともに戦後補償や歴史問題等の議論により、決して良好といえる時期ではなかったが、近隣諸国との関係に関して第三者の意見を伺うことができたのも、本国際会議の成果の一つであったと思う。

筆者が驚かされたのは、「日本人の近隣諸国に対する悪感情がこれ以上進むと心配だ」という意見であった。

筆者個人としては、「近隣諸国の国民から日本人が嫌われているのではないか」という感覚でいたところ、第三者からすると逆に映るといふのだ。

そして、今回招待してくれた韓国のBae Daeheon教授もこの発言に大いに触発されたようだ。日韓両国の友好関係を築くため、日本で会合を持つことになり、Daeheon先生、井出先生、筆者の3人で鹿児島県垂水市にて再会しようと約束を交わした。



左から、長崎大学の井出先生、筆者、慶北大学のDaeheon先生、清華大学のYigong先生



国際会議での講演と討論



国際会議後の懇親会

「世界10大遺跡地」の慶州

大邱市に滞在中、「新羅千年の古都」として輝かしい文化と歴史が生き残る慶州の名所をDaeheon先生に案内してもらった。慶尚北道慶州市陽南面ハソ港までの海沿いのウォーキングコース（約1.7km）が昨年6月13日に開通したとのこと。そこでは自然がつくり出した岩（扇子を広げたような形状）が、不思議な美しさを醸し出していた。

新羅全盛時代の仏教芸術の傑作品といわれる仏国寺も見事である。慶州の吐含山の麓にある仏国寺は石窟庵と共に、護国の念願を達するため、新羅第35代景德王10（751）年、当時の宰相であった金大成によって設計、創建された。三国統一後、国が最も安定し、文化が栄えた時期に建てられ、すべてが完全に備わった安楽と清潔な国になろうとする願いが込められている。

世界文化遺産に指定されている仏国寺は、現在もスケールの大きさに驚かされるが、最盛期の8世紀には総2000間の60余棟の木造建物で成り立った壮大なスケールを誇っていたといわれる。国際会議の後の、ほんの一時の静寂と安らぎを味わってきた。

3月の鹿児島県垂水市での再会

なんとも急な話ではあったが、国際会議の翌月、Daeheon先生、井手先生、筆者の3人が垂水市で再会した。

地元・協和地区の皆さんに誘われてウォーキング大会に参加した。桜島の噴火が活発化しており、滞在期間中で1日100回以上の噴火が記録されていた。ウォーキング中も噴煙と降り散る降灰を浴び、降灰とともに頬張るオニギリの歯応えは住民の皆さんの日ごろのご苦勞を象徴するものであった。

国境を越えて会話できるか？

国を越えた友好関係とは何だろう？ お互いが相手に対して抱く感情は、残念ながら一方向のものでしかないようだ。筆者が相手をどう思っているか、相手が筆者をどう思っているかという問題は、お互いを十分に知り尽くしていなければ理解できないことである。

日韓関係が取り沙汰されているということは、その時点で十分な会話ができていない証拠なのだ。そのなかで、自分が勝手に相手の感情を推し量っているだけで、的を射た捉え方になっていない。なぜなら、十分に理解し合っていないのだから……。

国境を越えた会話がどれだけできるか——、そこに挑戦する日本人でありたい。そして、国際化に遅れない日本人でありたい。



慶北大学のキャンパスでゲテモノを食した



慶州の海岸公園で記念撮影



仏国寺の美しい池



噴火を繰り返す桜島の前で再会